

# 命の大切さ、尊さを学んだ思春期教育



## お母さんに感謝

七月十三日に思春期教育学習がありました。十島村役場から二名の講師の方々が来て、お話をしてくださいました。話の内容がわかりやすく、出産の映像まで見せてもらえ、とてもいい経験になりました。その時の様子を、同じく思春期教育を受けた中学三年生の〇〇さんは次のように語りました。

「最初に赤ちゃんが生まれるまでのことを学習してから、妊婦さん体験と赤ちゃんに服を着せる体験をしました。妊婦さんは、腹筋が使えないので起き上がるのが大変だということ、体が重いということも学びました。本当にお母さんは、すごいと思いました。また、そのあとに赤ちゃんの着せ替えをしました。とても大変でした。僕は、大人になって結婚して、子供ができたなら、いろいろなところで手伝えるようにしたいです。」

口之島にも小さい子がいます。これからも、それぞれができる形で大切な命に携わりたいです。文責…

中二



## 世界に届け！！口之島

I realized that my mother was great

Two people came to the junior high school from The Toshima Village office and provided pregnancy, and child birth education. The content of the lesson was very easy to understand, and I was shown a video of a birth. My best memory was experiencing what a pregnant woman does. I put on a vest that weighed the same as a 10-month pregnant mother. Even just sitting down or taking off my socks was hard, but I was finally able to do it. Finally, I took off and put clothes on a newborn baby doll. I did it carefully so as not to break its bones. There is also a small child in Kuchinoshima, so I'm looking forward to seeing their growth.

{2nd year Junior High School Student}

# 9月号

十島村立  
口之島小中学校  
児童生徒会新聞  
9月28日発行

## 全島民避難訓練

### 改めて知る災害危機意識

七月六日（火）、図書室にて十島村役場の方々が風水害の災害について授業をしてくださいました。先日、口之島は大雨による土砂災害の被害がありました。だから、児童生徒全員が真剣に話を聞いていました。

私の地元が静岡県の東部にあり、そのすぐ近くの熱海市というところでも土石流の被害があり、改めて災害の恐ろしさが身にしみて分かりました。こうした大雨による土砂災害は年々増加しています。自分の命を守るために、ハザードマップの確認、避難場所の確認などの行動をできるようにしたいです。

他の友達にも感想を聞きました。

「私は、この前の口之島の降水量一・二ミリの記録した大雨で避難した時の恐怖



ができました。自分の命、そしてみんなの命を守るために、ハザードマップで確認したりして、自分なりにできることをしていきたいです。」

と中学二年の〇〇〇〇さんは語っていました。

小学三年生の〇〇〇〇さんにも避難した時の状況についてインタビューをしました。

「怖かったですか？」  
怖くない。でも少し不安だった。

「道や木はどうなっていましたか？」  
道は川のように木はゆれていた。

「大きな土砂崩れを見てどう思いましたか？」  
どうしよう、やばいって思った。

私も実際にこの時、大雨での避難を経験しました。大雨での避難はとても大変でしたが、冷静になって避難ができたと思います。

そして、この大雨での避難を経験しなかった友達も、実際に土砂崩れの現場を目撃したので避難訓練にも力が入りました。

小学生に避難訓練の様子

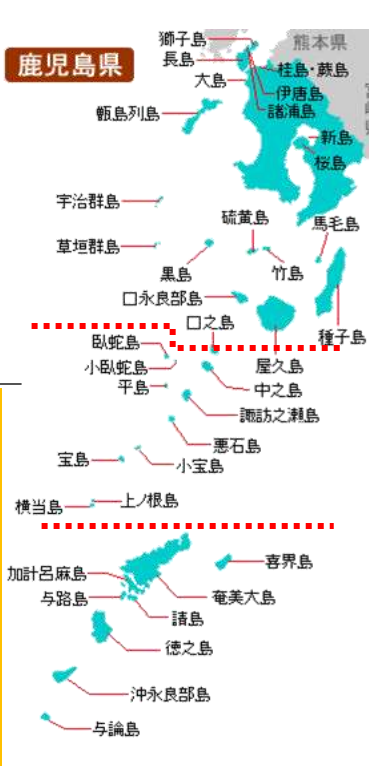




# 口之島珍百景を探せ！

## まだ知られていない口之島の歴史

口之島にはかつて国境がありました。今もそれを示す北緯三十度線の石碑があります。今年、十島村が本土復帰して、七十周年を迎えます。そこで、石碑に関わることについて調べてみました。



### 本土復帰の流れ

年代	出来事
1945年(昭和20)	太平洋戦争終戦 北緯30度線に国境
1946年(昭和21)	伊豆日本復帰
1952年(昭和27)	十島村日本復帰
1953年(昭和28)	奄美大島日本復帰
1968年(昭和43)	小笠原日本復帰
1972年(昭和47)	沖縄日本復帰

の領土下に置きました。だから、口之島には当時国境がありました。国境が北緯三十度線だったのです。

終戦する前は、十島村(としまむら)は十島村(じゅつとうそん)と呼ばれていました。今の三島村と十島村(としまむら)を合わせて十島村(じゅつとうそん)と言っていました。つまり、十島村(じゅつとうそん)は、竹島や硫黄島、黒島、口之島、中之島、臥蛇島、平島、諏訪瀬島、悪石島、宝島です。国境が北緯三十度線より北の三つの島(竹島や硫黄島、黒島)が十島村(じゅつとうそん)から離れていき、日本になりました。そのため、改めて三つの

# 黒ネコの時計



小5 〇〇

「昭和二十年八月十五日をもって、太平洋戦争が終わりました。アメリカは北緯三十度線を境にして、北を日本、南をアメリカ



### 勝つてくるぞと...

次に、太平洋戦争が終わった七十六年前に何があったのか、当時の口之島の様子をよく知る〇〇〇さんにインタビューしてみました。「戦争中の様子を教えてください」と言うところから、目には見えない線ですが、すごい重石だったわけですが、昭和二十七年二月四日に日本に復帰しました。二月十日に、新たな十島村(としまむら)がスタートしました。『と有村教育長はインタビューで語ってくれました。』

口之島の石碑は、太平洋戦争が終わった折念と、ここはアメリカと日本の国境だったということを後世に語り継ぎたいという思いがある。それが作られたことが伝わってきた。争が終わった折念と、ここはアメリカと日本の国境だったということを後世に語り継ぎたいという思いがある。それが作られたことが伝わってきた。

「飛行機もたくさん来て、学校も中止だから、私は疎開先に行って生活していました。すると、「B-29のマーチン」という飛行機よ。「やあ、飛行機が来た！」って言って、防空壕に逃げ込みました。そして、何件か家が空襲で焼けました。アメリカの潜水艦が海で見張るため、昼は潜って、夜は上がってくるから、明かりを漏らさないようにしていました。」

兵隊さんがフリー岳にいました。兵舎もあったから、十五・六人いました。兵隊さんは部落の人に「肉や野菜を持ってこい」と言ったので、肉は野生牛を殺して、野菜を採って持って行きました。水も学校生徒みんなでバケツで持って行ったが、着く時にはこぼれてバケツの半分にも水は無くなります。他にも、先生から兵隊さんへ作文を書くように言われました。兵隊さんが帰って来たとき、私に「あんたの作文届いたよ。ありがとね。」と言っていました。と、その当時は思い出しながら鬼気迫る様子で語ってくださいました。

口之島は畑や田んぼをしていました。戦争中も食べ物には困らなかつたようです。これは、他の島民も〇〇さんや〇〇さんも「麦とかさつまいも、サトイモ、お米もみんないっぱい隠れて作っていた。ただ、お米は貴重品だった。」「大麦をついて、ご飯に混ぜて食べる。そのため麦つきとかもさせられた」とおっしゃっていました。

日本の敗戦が決まり、ラジオからは玉音放送が流れ、十島村はアメリカの領地になりました。「そのとき、不便だったことは何ですか。」と質問すると、〇〇さんは「本土に行けないこと」と答えました。その頃の様子を〇〇〇さんは次のように語っています。

「北緯三十度線には警察がいましかた。赤瀬の辺りまでは船が来ます。アメリカの船は北緯三十度線より北には行けなかつたです。三十度線まではアメリカに占領されて闇市が広がり、商売ができたから、人口も五百人くらいはいました。」

村史にも密航船に関する記述が次のようにあります。

「口之島は、奄美の密航基地でした。密航船を捕まえに、アメリカの船が実弾を使って追っかけて来た(村誌より)」

実際、密航船は今の漁船くらいです。そこまで大きくなく、カバーで隠れて夜中に出発していたようです。

「アメリカの領地のときどんな生活をしていましたか。」

アメリカの配給で缶詰などが来ていました。アスパラガスの缶詰とか。さつまいもとお米とかはみんな持っているから。子供が下の田んぼに干した米を運んで、お米を庭に干して、俵に入れて、何十俵も作ります。そして、精米機はないから、もみ殻を擦って、白で米をつけていました。麦も臼にいれてついていました。

「復帰した後、どういふふうには変わっていきましか。」

びっくりしました。飛行機も何も来ないし、兵隊さんたちも帰ったから静かになり、何より怖いことないから。そして、お父さんたちは漁に行けるようになりました。みんなのお父さん達が漁に行つて魚を捕つて、かつおぶし製造していました。お母さん達は畑をして、食べるのに困らなかつたです。味噌を作るし、塩も炊きます。戸尻の海岸で、一晩中かかって塩を作ります。子供は遊ぶ暇なんてないです。水を汲んだり、草切りに行ったり、畑にからいもを植えるために畝あげたり、食べるために畑をしないといけませんでした。

日本復帰すると、口之島は経済的に厳しくなりました。「アメリカにいたときは、食べ物や着る物もいっぱい配布があったの。」「仕事はね。そのころはいっぱいあって、景気がよかつたと思う。大島の人たちがいっぱい来ていたよ。」と〇〇〇さんは語っています。また、〇〇〇さんも「配給はアメリカがよかつた。」と語っていました。それでも〇〇〇さんは「日本に戻ってきてよかつた」とおっしゃっていました。

三人の答えに少し違いがあるのは、年齢が違つたため、同じ状況を経験しても視点や感じ方も違つていたからだと思います。しかし、アメリカだったほうが景気がよかつたのは事実だけど、それでも自分の故郷に戻ってきてよかつたからという思いは同じだと思います。

僕は歴史の授業で戦時中の勉強をしました。別の目線から見られて、改めて戦争をしてはダメだと思えました。 文責：中三

